

Biodynamique ビオディナミ

【ビオワイン】【ヴァン・ナチュラル】【自然派ワイン】という言葉が聞きなれた今だからこそ、もう一度確認して日々のサービスの言葉に重み、安定感、余裕を持てるよう、今回は【ビオディナミ】について詳しく書いていこうと思います。

画像1



図左 Julien Meyerの畑

画像2



図右 他生産者の畑

昨年、アルザスの生産者Julien Meyerに畑を見せて頂いた際、収穫後の畑ではありましたが、周りの他生産者との畑の違いにとても驚かされました。

その明らかな違い、画像1の様にJulien Meyerの畑には草がしっかりと生え、葡萄の樹にはほとんど葉がついていないのです。

一見心配になるほどの状態に見えましたが、話を聞いてみると全く別の話で、右の畑は科学肥料による作られた、いわゆる元気にされた樹であり葉だったのです。

化学製品によって元気にされた葡萄は、樹の見目はこのように元気に見え、出来上がった葡萄の実も水々しく大きく出来る。しかし、その内容は非常に薄く、出来上がったワインの構成も非常にシンプルに仕上がってしまうのです。当主パトリック曰く

「元々のこの地のテロワールを体現しているのが私の畑、だから地面にはこのように強い草が生える。なぜ葡萄自体に免疫力があるのに他の物質を与えるのか？」

そして、画像では伝わりづらいのですが、その明らかに違うのは土壌、そう【土】です。

Julien Meyerの畑に生い茂る草に隠れるその土は、実際に素手で掘れる柔らかさでした。

しかし隣の畑の土を触ってみると、素手はもちろんスコップでも掘ることが難しく、ガチガチの畑でした。

当主パトリックの栽培に関しての信念。それは“土”。

1999年から100%ビオディナミ農法を続けるJulien Meyerでは

その力を存分に生かした栽培をしていました。そのフカフカな畑もほとんど手を加えている訳ではなく、

地中に住む力を存分に信じた結果だったのです。それについても

「土壌は5センチごとに階が分かれたアパートのような物だから。

階ごとに違う人間が住んでいて、それぞれの人生がある。

例えば上層階は酸素と窒素が必要だが、下の階はそれほどでもない。個人のプライバシーは保たなければならない。

しかし不思議な事に最上階に刺激を与えるとポンプのように下に階にもエネルギーが伝わる。

小さなエネルギーの移動が大きな効果を生むんだ。」

まさに生きた畑、ビオディナミの力を目の当たりに出来た瞬間でした。

では今回のテーマ、そもそもビオディナミとは何なのか？

ビオディナミ(生力学農法)

オーストリアの思想家ルドルフ・シュタイナー(1861年～1925年)が提唱した農法。

この農法は、生物の潜在的な力を引き出し、土壌に活力を与えて作物を育てるという点に重点が置かれています。

ギリシャ語でビオは「生命」、ディナミーは「エネルギー」、つまり植物が生きるエネルギーを引き出す農法といえます。

ビオディナミ農法は“農薬を使わない”だけでなく、月や惑星などの天体と地球のつながりを考え、

農作業を月、惑星、星座の位置を記した播種カレンダーに基づいて行い、

畑を取り巻く生態系の形成を重視し、科学薬品や肥料を基本的に否定し、

プレパラシオンと呼ばれる自然由来の調合剤を肥料として畑に撒いて、土壌の活性化を図ります。

学術的に考えてしまうとオカルトな印象を受けてしまいがちではありますが、

昔の方々は天体と地球の関連性について現代の人々よりも身近にあったため普通に行われてきたことです。

ちなみにビオディナミといえば葡萄のイメージはありますが基本はすべての農作物に対して適応される農法であります。

そしてビオディナミを発展させたコスモ農法というもあり、古代マヤ文明やインカ文明の農法に由来するものまであります。

では【ビオロジック】【リュット・レゾネ】【自然派】とは？

biologique

【ビオロジック】(有機農法)

ビオロジック農法とは「有機栽培」のことを指し、「自然を尊重した農業形態」つまり、除草剤や殺虫剤などの化学薬品、化学肥料に頼らない農法のことをいいます。畑や作物にとって最も自然に近い環境作りを行います。

病虫害の予防に硫黄や銅など(ボルドー液など)の使用が認められています。

1991年にヨーロッパ連合(EU)で定められた有機食品の中で、ブドウ栽培については次のように定義付けられている。

- ・化学肥料や農薬(除草剤や殺菌剤、殺虫剤、防カビ剤)を使用しない
- ・有機肥料を使用する場合は、EUで認証されたものだけを使用
- ・遺伝子組み換えや放射線処理は禁止とする

そして上記の3項目を植え付け前最低2年間、最初の収穫前3年間以上実施している

フランスにおけるビオロジック・ワインの認証機関は、以下のようなものがある。

- ・エコセール: EU諸国に拠点を持つ欧州最大にして世界最大級の認証機関
- ・ナチュラル・エ・プログレ: フランス全土に拠点を持つフランス最大の機関
- ・アグリキュルチュール・ビオロジック: フランスを中心としたEU諸国などに支部を持つ

酸化防止剤(SO₂)使用についての定義は、EUの定める一般的なワインの基準とさほど変わらないが、暗黙の了解で極力少量の使用に留めるように努める生産者も多い。

lutte raisonnée

【リュット・レゾネ】(減農薬農法)

人工合成による化学肥料や除草剤等の薬剤を使用せずにブドウ栽培を行う方法で、

病虫害の発生などがあった場合に出来る限り必要最小限の使用を行います。

農薬に関しては葡萄の病気等どうしても必要な場合に限り極少量散布することが認められているのです。

農薬使用の基準が定められていない為、有機農法に含まれないとすることもあります。

現在最も広く採用されている農法で、対処農法、減農薬農法、環境保全型農法とも呼ばれます。

細部の違いによりリュット・アンテグレ(lutte intégrée)などのバリエーションがあります。

Vin Naturel

【ヴァンナチュール】(自然派ワイン)

定義はないとされています。

手段よりも、自然を尊重するという「目的」あるいは「意図」に着目した表現であり、

結果として有機栽培、自然酵母による力、亜硫酸の抑制された、生産者の想いの詰まったワインということになります。

近年ヴァン・ナチュールが作られるようになった背景

今から約150年以上遡った昔はみな有機農法(ビオロジック)でした。

戦後のフランスでワインを大量生産するために、大量の化学肥料や除草剤、殺虫剤が葡萄畑にまかれてしまいました。

そして土壌が個性を失ってしまったことが原因で、質の良い葡萄が栽培できなくなってしまいました。

いつしか昔ながらのその土地土地の味わいが失われてしまったのです。

醸造の際に、自然の力でアルコール発酵をさせるには良質で強い葡萄でないと難しく、

醸造においても培養された人工的な酵母を使って発酵させないとワインを製造することができなくなってしまいました。

つまり、化学の力を借りるしかなくなってしまったのです。

そのことに気づいた生産者は、自分たちの土地とぶどう本来の味わいを取り戻すため、

化学肥料も農薬も使っていなかった昔に戻ろうとしています。それが現代で言うナチュラル派(自然派)の火付けです。

しかし、有機農法でぶどうを栽培することは本当に大変なことです。

有機農法に転換するために、何年もの歳月をかけた生産者がほとんどなのです。

ビオディナミの話に戻ります。

農業暦(ビオカレンダー)とは？

太陰暦に基づいた「農業暦」にしたがって種まきや収穫などを行い、月やその他の天体の動きが植物に与える作用を重視した農業暦(太陰暦に基づいて種まきや収穫などを行う。)を用いた栽培をしています。ただし重視しているのは重力や放射線などの実際の力学的な作用ではなく、占星術などで培われた知識を元にした秘教的・非科学的なものです。太陰暦だけでなく、黄道十二宮や惑星の位置と関連させて決定されています。

ホメオパシーとは？

もともとは医学用語であり、同毒治療や類似療法とよばれる治療法です。基本的には現在おきている、もしくはこれからおこる症状と同類のものを極微量、希釈し使用することにより症状に対する免疫力を持たせたり治療したりする効果があるとされています。これを農業に採用し、ペット病やうどん粉病などの病害に対する免疫力を持たせます。このホメオパシーを利用するための方法はこれもやはり希釈させることが重要であり、各、病気の兆候が発生したのち、原因となる病原菌を採取し水などで希釈させてこれを畑に散布させることによりブドウの樹が本来持つ自己の治癒能力を高めることを補助する役割を果たすのだそうです。こうすることにより病気に対する免疫力を持たせ、進行するはずであった病気が後退していくそうです。このホメオパシーの使用は原因となるものを排除、撃退するのではなく、あくまでもこの原因菌は畑(大地)の中に存在しこの原因菌が多すぎることが問題でありそれらを理解したうえで共存の中に活路を見出し、受け入れ病気の進行に対して自らの治癒能力や免疫力を持たせるための手段として使用されます。こういった自己治癒能力を上げてあげることによりボルドー液等の使用が減り、土壌や周辺環境の汚染を防ぐ、抑えるなどの利点があるのです。

プレパラシオン(調合剤)とは？

シュタイナーは、499番からなるホメオパシーの延長として、500番から508番の9種類の調合剤(プレパラシオン)を考案しました。基本は2種類に分けられており、畑に散布されるものと堆肥にまぜて使用されるものがあります。それらは土壌や葡萄樹の能力を引き出す為に必要なもので、畑へ散布したり、堆肥へ入れたりすることによって、宇宙的なエネルギーを受け自然界に存在する微生物を活性化させる効果があるそうです。これらの調合剤の使用はそれぞれの特性にあった時間にあわせて散布されたり、農業暦というビオカレンダーを見て最適な日に撒くことによりその効果を発揮させ、天体との関係が補助され土壌やブドウ樹の活力が強化されていくのだそうです。調剤は、その土地にある微生物を活性化させることによって、現在は、生物力学的に理想的ではない環境においても、理想な自然な状態に近づけることができるとされています。

番号	調合剤	使い方	目的
500	雌牛の糞	雌牛の角に糞を詰めて土の中に冬につくり、雨水で希釈し散布	根の強化
501	水晶(長石・石英)の粉	砕いて雌の牛角に詰めて5ヶ月土中に埋め希釈し散布	根の強化
502	セイヨウノギリソウの花	アカシカの膀胱につめて一冬寝かし、夏にまく	硫黄の供給
503	カモミールの花	秋に牛の小腸につめて、春にまく	石灰分の供給窒素量を調整
504	イラクサの腐葉土	乾燥させておいて、使う時に煎じる	窒素と鉄分の供給
505	オークの樹皮	樹皮を細かく砕き、家畜の頭蓋骨につめて一冬寝かせたもの	植物の病気に対する治癒力
506	タンポポの花	牛の腹膜につめて一冬越したのもの	珪酸の供給
507	セイヨウカノコソウの花	絞った汁を発酵させたもの	リンの供給
508	スギナ	陰干しして乾燥させ、煮出して使う	サビ病など病害を防ぐ

前図を詳しく

・500番

牛糞を雌牛の角に詰めて作られる調剤。土の力と植物との間に良い関係を築かせる調剤。土に撒く調剤で、大地を活性化する。その結果、地中の細菌、微生物、虫等の繁殖を助け、根の成長を促し、樹液の循環を刺激するのだそうです。水の中で攪拌して土に散布します。

・501番

水晶を雌牛の角に摘めて作られた調剤。宇宙の力と一緒に働き若い作物の同化プロセスを促進し、組織を丈夫にする働きがある。植物が太陽の光とよりよい関係を保つように働く。植物の光合成を刺激し、作物の新陳代謝を促進し、色づき、芳香、風味を良くする。病気や害虫に対する抵抗力を高める。水の中で攪拌して地上に散布します。関係する惑星は太陽。

・502番

ノギリソウ(アキレー)の花を牡鹿の膀胱に詰めて作られる調剤。大地を活性化し、植物の内の物質に対して硫黄の量を調整し、硫黄やカリウムの利用を助ける。また、必要な微量元素の吸収を助ける。関係する惑星は金星。

・503番

カミツレの花を雌牛の小腸に詰めて作られる調剤。土の中の窒素を安定させ土の生命力を増やし、土壌のシリカ(ケイ素)量を調整する。カルシウムと硫黄と関係を持ち、シリカとカリウムを正し関係に保つ。また、カルシウムと硫黄との関係を持つ。関係する惑星は水星。

・504番

イラクサを土に埋めて作られる調剤土が必要とするカルシウムと鉄を調整し、土を健康にする。硫黄との関係を持ち、堆肥から窒素分が蒸発するのを防ぐ。関係する惑星は火星。

・505番

カシの樹皮を牛の頭蓋骨に詰めて作られる調剤。非常に活性化したカルシウムを含んでいて、植物の病気に対する治癒力をもたらす。月の諸力の影響を抑える働きを持つ。カルシウムと関係を持つ。関係する惑星は月。

・506番

タンポポの花を牛の腸間膜詰めて作られる調剤。ケイ素が土に宇宙の力を吸収することが出来るようにケイ素とカリウムの関係を調整する。関係する惑星は木星。

・507番

カノソウの花から作られる調剤。土のリン酸分の調整機能を向上させ、堆肥への強力な活性化作用を持つ。堆肥の発酵を助け、霜、寒さから植物を守る。水で薄めて堆肥に振りかける。関係する惑星は土星。

・508番

スギナを煮出して作られる調剤。さび病等の真菌類による植物の病気を抑える調剤。各調剤の調整的な役割を持ち、植物の品質を改良する。

最後に

普段、私達が毎日のように耳にし、簡単に口にする言葉【ビオ】。ですがそこには生産者の想いがあるということを私自身深く考えさせられました。普通に、毎日のように、そういったワインをサーブ出来る事がどれほどの事なのか。初めてそうゆうワインを口にするお客様がいたとして、それをサーブするのが自分だった場合、どれほどの温度(気持ち)でそれを伝え、喜んで頂き、又時には理解して頂くのか。私達は色々な意味で、正しく深い知識を求められている立場なのだとも痛感いたしました。決して振りかざさず、知識・理解をしまい、お客様によって、どのようにそれを出していくのか。大きな課題だと思いますが、もっと突き詰めて引き出しを増やしていく事、とても大事だと思います。